

的染色では、cytokeratin 陰性、EMA 陰性、LCA 陰性、AFP 陰性、HCG 陰性、placental alkaline phosphatase 陽性であったためセミノーマと診断した。現在、化学療法 (CDDP+VP-16+PEP) にて治療中である。

21. 前縦隔原発の B 細胞リンパ腫の 1 例

長崎大学医学部第 2 内科

三原 智, 土井誠志, 中野浩文
中村洋一, 早田 宏, 河野 茂

長崎大学医学部・歯学部附属病院病理部
林徳真吉

症例は 79 歳男性。約 3 ヶ月前より左前胸部の疼痛が出現、1 ヶ月前より感冒を繰り返すようになり当科受診。胸部 CT にて前縦隔に腫瘤影を認め精査加療目的にて入院となった。血液検査に異常を認めず hCG、抗アセチルコリンエステラーゼ抗体は陰性、甲状腺機能、副腎機能も正常であった。胸部 CT では前縦隔に 7.5 cm×5 cm の内部に low density area を含む腫瘤影を認め、一部前胸壁まで進展していた。胸部 MRI では T1W1 にて低～中信号、T2W1 にてやや高信号であり、中心部に壊死を思わせる T2 高信号を認めた。病理組織では円形核を持つ細胞が蜂巣状に増殖しており免疫染色などからびまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫の診断となった。前縦隔原発の B 細胞リンパ腫は比較的稀な腫瘍であり今回報告する。

22. 左迷走神経より発生した縦隔悪性神経鞘腫の 1 例

国立病院九州がんセンター呼吸器部

庄司文裕, 丸山理一郎, 岡本龍郎
麻生博史, 池田二郎, 宮本哲也
中村朝美, 三宅徹郎, 一瀬幸人

同 病理部 西山憲一

縦隔内に発生する神経原性腫瘍のほとんどは交感神経あるいは肋間神経由来であり、胸腔内迷走神経からの発生は稀である。今回、左迷走神経より発生した縦隔悪性神経鞘腫の 1 例を経験したので報告する。症例は 47 歳女性。左頸部腫瘍を指摘された。CT 上、左上縦隔から鎖骨上窩にかけて径 5 cm の塊状影を認め、穿刺細胞診にて class V, large cell carcinoma susp の診断に

至った。左肺癌 (cT4N3M0) と考え、術前化学放射線同時併用療法後、手術を施行した。腫瘍は肺外病変で被膜を有し、迷走神経及び交感神経と強固に癒着していたため、両神経を切断し腫瘍を摘出した。摘出病理標本にて迷走神経より発生した悪性神経鞘腫であることが判明した。

23. 末梢肺組織における対立遺伝子欠失 (LOH) と喫煙との関連について九州大学大学院消化器総合外科

饒平名知史, 吉野一郎, 川野大吾
小副川敦, 亀山敏文, 米谷卓郎
山口正史, 前原喜彦

【背景】中枢気管支上皮における発癌は喫煙による遺伝子異常との関連が知られているが、末梢型肺癌である腺癌では、喫煙関連遺伝子異常の報告は少ない。【目的】末梢肺腺癌の LOH と喫煙との関連について検証する。【方法】切除標本より癌組織、末梢肺正常組織の DNA を抽出し単核球より抽出した DNA をコントロールとして 17p, 3p, 9p 領域の LOH の有無および喫煙との関連性について検討する。【結果】腺癌症例 (n=24) の LOH (17p または 3p または 9p) の頻度は癌部にて 17%, 非癌部にて 7% であったが、喫煙者 (n=15) に限ると LOH (17p または 3p または 9p) の頻度は癌部にて 20%, 非癌部にて 11% であった。【まとめ】末梢肺組織における LOH の頻度は低いものの、腺癌組織では喫煙関連遺伝子異常が存在する可能性が示唆された。

24. 非小細胞肺癌における PRL-3 (Phosphatase of regenerating Liver-3) 発現の意義

九州大学消化器・総合外科 (第 2 外科)

亀山敏文, 田中真二, 吉野一郎
小副川敦, 米谷卓郎, 饒平名知史
山口正史, 前原喜彦

【背景】増殖・分化に関係するチロシン脱リン酸化酵素 PRL-1 の homologue である PRL-3 は、大腸癌の転移に関係すると報告されている。【目的】非小細胞肺癌の PRL-3 遺伝子発現の意義を検討する。【対象と方法】非小細胞肺癌 39 切除例に対し PRL-3 の定量 RT-PCR を行い、臨床病理学的因子と

の相関を解析する。【結果】癌組織の PRL-3 発現は、正常肺の 2.91 倍であり (p<0.001)、発現高値群は、ly+, p2 以上の症例が有意に多く (p=0.008, 0.043), pT2 以上, pN1 以上, 低分化型の症例が多い傾向を認めた (p=0.062, 0.083, 0.083)。高値群 (5 生率 45%) は、低値群 (5 生率 72%) より有意に予後不良であった (p=0.035)。【結語】PRL-3 発現は、非小細胞肺癌において浸潤、予後に対するマーカーになることが示唆された。

25. 非小細胞肺癌における p27 の発現と調節

九州大学大学院消化器・総合外科

小副川敦, 吉野一郎, 山口正史
亀山敏文, 米谷卓郎, 饒平名知史
前原喜彦

【目的】p27 は癌抑制蛋白であり、核内での分解は Skp2 により、核外での分解は Jab1 による核外移行により制御されている。肺癌におけるそれぞれの発現について解析した。【対象と方法】非小細胞肺癌 138 症例を対象として、p27, Jab1 及び Skp2 発現を免疫組織学的に検討し、臨床病理因子との関係について検討した。【結果】1) Skp2 は男性、扁平上皮癌、喫煙者で高発現であった (p=0.03, p<0.01, p<0.01)。2) p27 と Skp2 の発現に逆相関を認めた (p=0.01)。Skp2 陰性群においては p27 と Jab1 発現に逆相関を認めた (p=0.02)。3) Jab1, Skp2 高発現は、それぞれ病理病期と独立した予後不良因子であった (RR=2.25; p=0.01, RR=2.04; p=0.01)。【結語】1) 非小細胞肺癌における p27, Skp2 及び Jab1 発現の関連が示された。2) Jab1, Skp2 高発現は、独立した予後不良因子であった。

26. 肺癌の予後因子としての Hsp (Heat shock protein) Family の発現亢進

佐賀大学医学部内科

千住 恵, 末岡尚子, 富永正樹
林真一郎, 末岡榮三郎
佐賀県立病院好生館病理検査部

富永正樹, 入江康司
Hsp は細胞内分子シャペロンであり、ストレス状況下で発現が亢進する。